

へきけんニュース

ホームページ https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291 FAX 0154-44-3292



背景は北海道教育大学札幌校

文部科学審議官によるへき地・小規模校教育推進講演会 ・第19回へき地・小規模校教育推進フォーラム2021に ぜひご参加ください！

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター

文部科学審議官によるへき地・小規模校教育推進講演会及び第19回へき地・小規模校教育推進フォーラム2021を、以下のとおり開催します。当センターのホームページ上で参加者を受付中ですので、ぜひお申込みください。

●文部科学省・丸山洋司文部科学審議官のへき地・小規模校教育推進講演会

日 時	令和3年11月5日（金）15時30分～17時00分
講 師	文部科学省文部科学審議官 丸 山 洋 司 氏
主 催	北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
共 催	全国へき地教育研究連盟
参加方式	同時双方向型（Zoom）
発 信 地	北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター

●第19回へき地・小規模校教育推進フォーラム2021

日 時	令和3年11月12日（金）15時30分～17時30分
主 催	北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
共 催	全国へき地教育研究連盟 北海道教育大学未来の学び協創研究センター
参加方式	同時双方向型（Zoom）及び対面型のハイブリッド
対面式会場	北海道教育大学札幌校第1・2会議室

参加希望の方は、以下のホームページにある申込フォームよりお申込みください。
申 込 先 北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターホームページ
URL : https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/

北海道立教育研究所主催、北海道教育大学、北海道へき地・複式教育研究連盟共催 「これからのへき地・小規模校教育充実研修【遠隔合同授業】 ～へき地・小規模校における授業と研修を結び付けた実践～」 研修講座報告

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター センター員 前田 賢次（教育学部札幌校准教授）

2021年9月10日（金）、道研が主催する研修講座は、へき研センターから玉井康之センター長、小澤一記（釧）、渥美信彦（旭）、前田賢次（札）のセンター員が運営協力しました。講習受講者は全道各地からへき地小規模の小中学校教員16名が参加しました。

昨年度と同講習は札・旭・釧の3会場を遠隔会議システムで結んで行いましたが、本年度は新型コロナ禍による緊急事態宣言下ということもあり、Zoomによる非対面の遠隔講習の形で実施されました。



まず、参加者所属校や地域のICT教育利活用の現状が交流されました。GIGAスクール推進によって、端末や回線などの環境整備は進んでいますが、やはりまだ十分とは言えず多くの課題に対して試行錯誤しながら遠隔合同授業を模索している様子がうかがえました。また遠隔合同授業の実施校や、回線自体が整備されていない学校からの参加者が持つ問題意識の多様性に応える難しさが実感されました。

次に、今後の指針と参考にすべく、へき地複式校のICTを活用した合同遠隔授業の事例として積丹町と幌延町の取り組みが紹介されました。

積丹町内の四つの小学校（余別小・日司小・美国小・野塚小）を結んだ合同遠隔授業の報告では、以前から対面で行ってきた集合学習を合同遠隔授業として実施するところから、道徳・国語・算数・社会やクラブ活動などの教科外、さらに放課後の学習支援で遠隔地の大学生講師と結ぶことなどに広げていく取り組みが紹介されました。

できそうな所から着手し、既存の機材を活用する教職員のボトムアップによる取り組みには多くの学ぶべきところがありました。多校間の事前の打ち合わせ、多学級での学習進度の統一、機器の準備の簡略化の課題への対応や、今後の方向性も示されました。

他校との遠隔学習の課題

教職員同士の事前打ち合わせが必須	積丹町ではこうしていました その時間のリーダーになる先生を決める。リーダーが提示する活動案をメールで送付。電話等で確認し合って、授業開始
学習進度を揃えるのが難しい	まずは道徳から。次に国語等の単元終末部で。やがて単元途中のクライマックス部分などへ
機器のセッティングが面倒	使える物はとにかく使う。代用しながら、正式な物品をまとめておく。今年度からは一人一台端末でとてモ業。

上段 余別小
下段 日司小
左モニター拡大 余別小メイン授業者

やがて他教科へ

3年生 国語「伝えよう楽しい学校生活」の発表場面	3年生 国語ローマ字学習初発場面	4年生 国語自作の詩の発表場面
4年生 算数図形の面積を求める問題	6年生 社会ポスターセッション	4年生以上クラブ活動計画段階

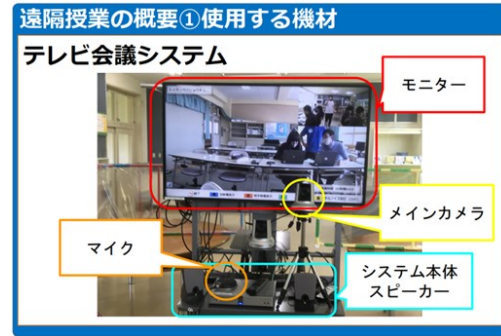
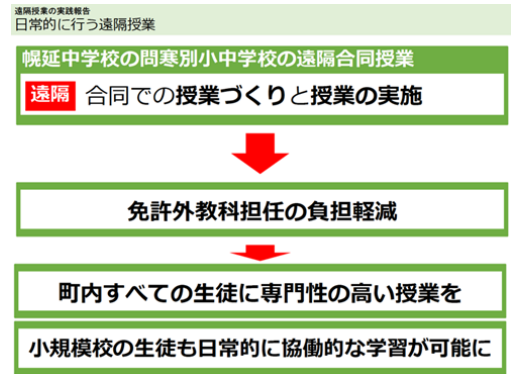
積丹町の取り組み方

○できること、できそうなことからやってみた。
↓
改善点を寄せ合ってより良いものにしてきた。
* G I G Aスクール構想のおかげで、接続状態も大幅に改善

○無くてもあきらめず、ある物を工夫して使ってみた。
↓
「こんな物があればいいのに」と思う物は大体手に入ります。
*今年度から一人一台端末で飛躍的に取り組みやすい

○Skype⇒Zoom⇒Teams

幌延町の報告は、町内の幌延中学校と問寒別（小）中学校を結んだ中学社会科の合同遠隔授業の取り組みでした。中学校では教科免許の問題がかねてからありました。この対応として免許を持つ教員が授業者となり、自他校の免許外教員が支援する合同遠隔授業に2018年から取り組んできています。幌延中学には2020年、文部科学省の遠隔教育システム導入実証研究事業に選定、SINETとテレビ会議システムが整備されています。1・2年生は105時間、3年生は140時間、社会科の全ての時間を合同遠隔授業で行うというものでした。ただし、今年度は1年生のみ、英語・道徳でも実施しています。



午後の部は、玉井康之センター長と北海道へき地・複式教育研究連盟の温泉敏氏による発表と対談がありました。温泉氏からは全へき連のICT活用の取り組みについての報告が、玉井センター長からは本年3月に行った道内へき地小規模校のICT活用のアンケート結果の報告がありました。

また、対談では小規模の学校や学級における教育活動の特色と有効性、その弱点を補うために今後さらにICTの教育利活用を追求する必要があることがそれぞれ確認されました。

新たな研究大会の取組

全国へき地教育研究連盟では

- ①へき地教育振興法のもと、全てのへき地校職員への研修の機会
- ②GIGAスクール構想からくる学校のICT化
- ③コロナ禍のピンチをチャンスに

↓

全道へき地・複式教育研究大会 オホーツク大会
分散会をリモートで実施（ブレイクアウトでのグループ協議も）
授業ライブ配信・見逃し配信（期間限定）

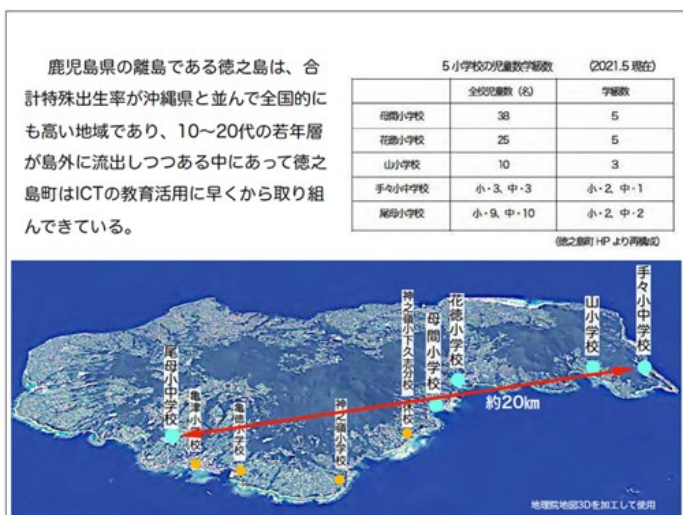
全国へき地教育研究大会宮崎大会
分散会のライブ配信
授業ライブ配信

▼授業において今後活用の可能性があるICT利用方法（へき地校・非へき地校別）

	1. オンラインテスト（自動採点含）の実施	2. 学習データを基に評価を実施	3. デジタルポートフォリオの活用	4. 授業の振り返りアンケートをオンラインで実施	5. オンラインを活用した相互評価の実施	6. 授業で使う資料をクラウドに置いて活用	7. オンラインで学習課題を提出	8. 教材動画を視聴	9. 授業に必要なアプリの使用	10. 実験等のデータ処理で使用	11. 実物投影機を活用	12. 黒板の代わりにスライドを活用	13. 授業のテーマに合わせた動画を作成	14. 電子黒板等を活用し、個々の子供が端末で書いた内容を全体に提示	15. 電子黒板等を活用し、子供が端末で作成した資料を比較・提示	16. 写真・動画・音声等を活用したプレゼンテーション資料の作成	17. オンラインの同時編集機能を用いた資料・プレゼンテーションスライドの作成
1.へき地学校及び準へき地校に該当しない学校	41.0%	52.2%	54.4%	62.3%	35.3%	80.3%	66.2%	91.0%	83.3%	46.7%	72.8%	73.5%	50.9%	57.5%	54.0%	82.9%	45.8%
2.へき地学校及び準へき地校	28.1%	47.2%	50.6%	57.7%	31.1%	75.3%	61.4%	85.8%	83.5%	46.1%	71.9%	66.7%	46.8%	58.4%	55.8%	82.8%	42.3%
合計	36.7%	50.6%	53.1%	60.8%	33.9%	78.7%	64.6%	89.3%	83.4%	46.5%	72.5%	71.3%	49.6%	57.8%	54.6%	82.9%	44.6%

その後の講義では前田賢次センター員が、鹿児島県徳之島町の複式学級間における遠隔合同授業の取り組みを紹介しました。

同町では5つの複式学級を持つ学校間をICTでつないで、多様な教育活動が行われています。この取り組みはへき地複式小規模校に限らず、全国的にもICTの教育利活用の先進事例としても知られています。試行錯誤された学校間における教員の協働の蓄積が、この取り組みを支えていました。



授業の形態は大きく以下の5つのステップの形で整理されている。

ステップ① 単学級—単学級 (発表形式)
 ステップ② 単学級—単学級 (授業形式)
 ステップ③ 多地点
 ステップ④ 複式学級—単学級
 ステップ⑤ 複式学級—複式学級

ステップ①は2校間の同一学年をつなぎ、それぞれの学習成果を発表し意見交換する形態で、単元末に行われることが多い。いずれも国語科で、1年生の授業はUCSを用いている。

ステップ②は2校間の同一学年 (複式一本案の場合などはステップ④を含むと考えられる)をつなぎ、通常の授業を行う形態である。

ステップ③は3校以上の学校を結んだ合同授業の形態である。ALTが三つの学校に授業をしたり、学活の行事などとして行うことが多いという。

ステップ④は2校間の複式学級をつないだ授業形態であり、「徳之島型モデル」と呼ばれているものである。2校の教師が、それぞれ本校と他校の1つの学年を遠隔合同授業として担当しあう。そのためにそれぞれの学校では、2つの学年分の遠隔授業の場の設定が必要となる。

徳之島型モデルは形態としてとらえられがちであるが、その内実にある複数校の教員の協働による授業開発や教育課程開発、それに伴うフォーマル及びアンフォーマルな教員研修を含めた形でとらえることが重要である。試行錯誤した遠隔授業の蓄積から2020年には関係する学校の教師たちにより、共通の研究課題が以下の3視点に整理された。

視点1 学びある遠隔合同授業ができる ～単純化・簡素化するための工夫や対策～
 ア 遠隔合同授業における協働学習スタイルの確立
 イ ガイドの手引きを用いたガイド学習の充実
 ウ 指導過程の統一

視点2 誰でも合同授業ができる ～単純化・簡素化するための工夫や対策～
 ア 機器操作のマニュアル作成とそれを用いた機器操作の共通理解
 イ 遠隔合同授業に適した単元のねらいと計画
 ウ web会議システムを用いた遠隔合同授業モデルの確立

視点3 いつでも遠隔合同授業ができる ～日常化に向けた工夫や対策～
 ア 学習規律の統一
 イ 校時表(朝の活動)の統一と交流発表の充実
 ウ 打ち合わせの簡略化

遠隔授業システムと場の設定

- ・ 通常教室以外に、学校共用の遠隔合同授業のための場を設けることが望ましい。
複式学級での実施には1校に2セットが必要。
- ・ 遠隔授業システムの導入が望ましい。
既存の機器でも代用が可能であるが、接続や設定等の支援は必要。
- ・ 安定した接続のための通信回線は必須。

最後に、受講した教員が講習全体をふまえ、今後所属校でどのような取り組みを行うかの構想と発表があり、参加した3人のセンター員が発表に対する講評を行って講習を終了しました。

参加したへき地小規模校の教員から聞き取った北海道の状況からは、ICTの教育利活用を支える通信回線の整備の地域格差が大きいことが明らかになってきました。

また、GIGAスクール構想の推進によって端末の整備は進められたものの、それとは別に遠隔合同授業を恒常的に行うための機器や場づくりの課題があることも明らかになってきました。

道内の先進事例として紹介された取り組みでも、学校や教員の工夫と苦勞によって支えられてきたことが紹介されました。今後、へき研センターとしてどのように道内学校のICTの教育利活用に働きかけていくことができるのかの検討と取り組みが必要となっています。